

繪本拾遺信長記

前篇

十二

特別  
13  
2507  
12



門 遠  
號 2507  
卷 23-12

繪本拾遺信長記初篇卷之十二

目録

鈴木豊人被捕歎事

日圓

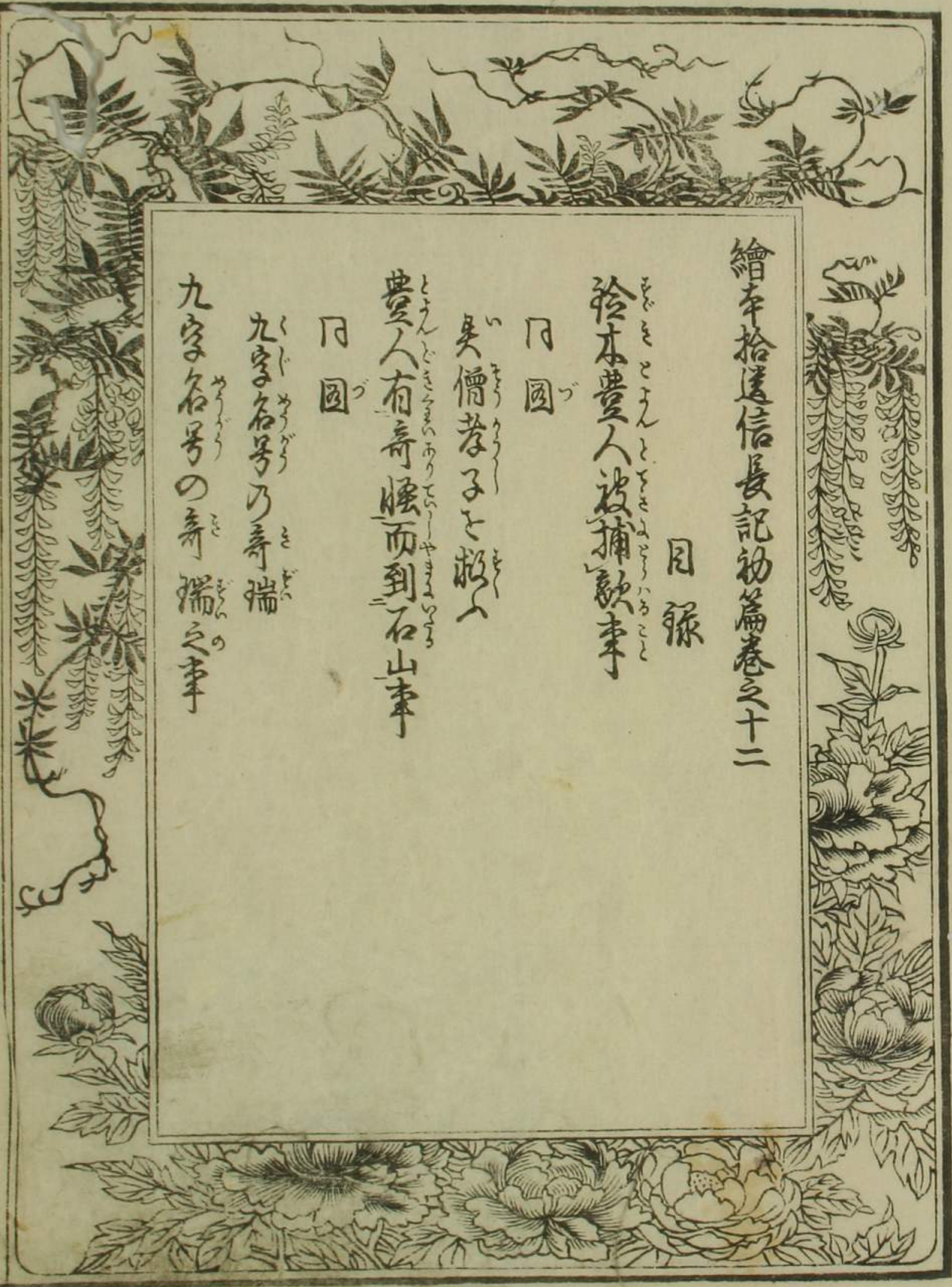
吳僧孝子と救入

豊人有奇怪而到石山事

日圓

九字名号の奇瑞

九字名号の奇瑞之事





本津の若合戦

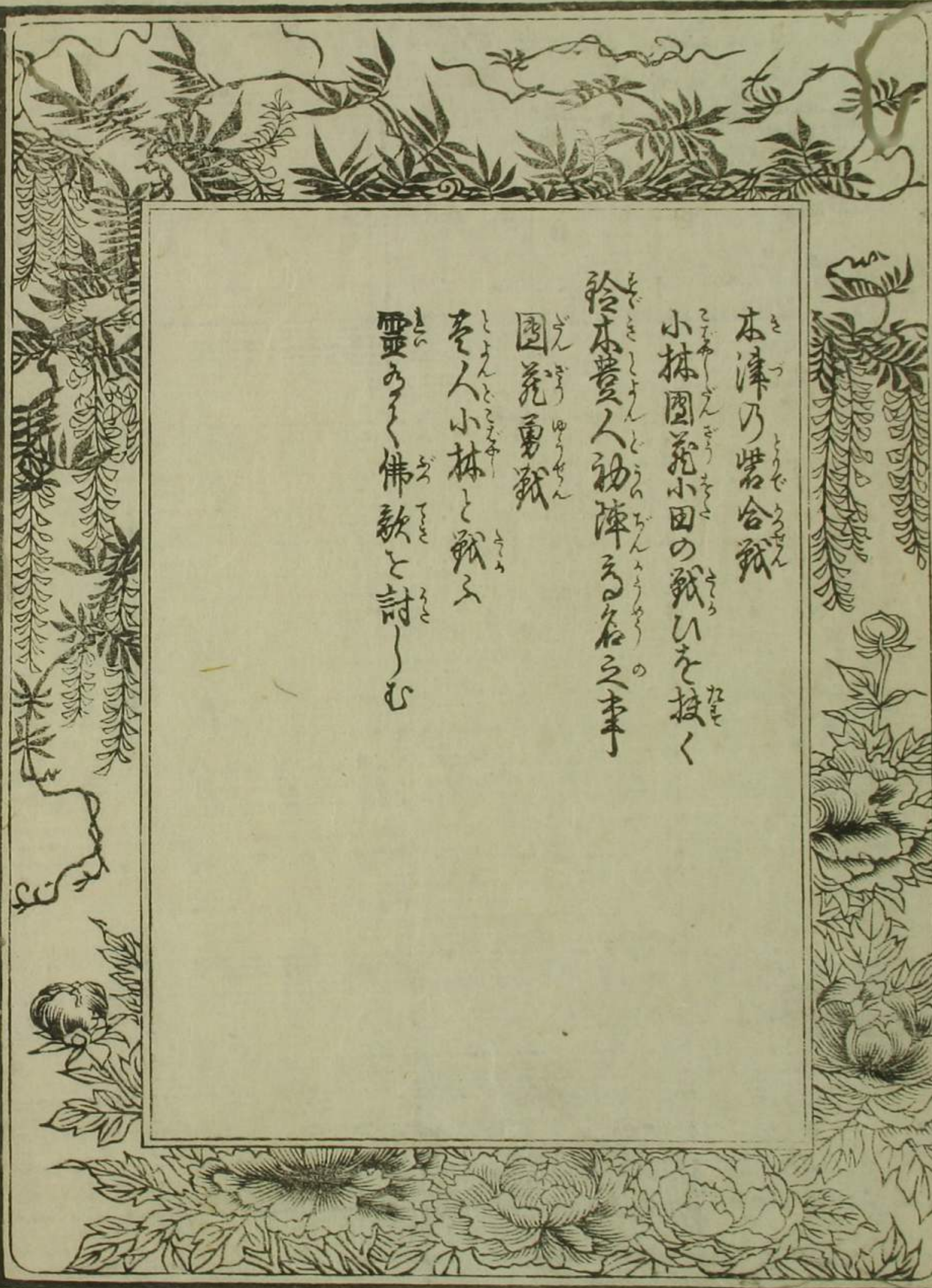
小林園苑小田の戦いを抜く

鈴木豊人初陣する名三事

園苑勇戦

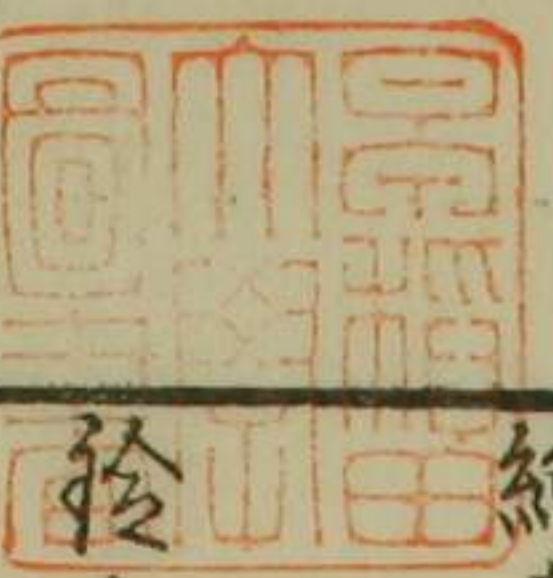
を人小林と戦ふ

靈ありく佛教と討つむ



繪本拾遺信長記初篇卷三十二

鈴木豊人被捕歎事



石山の城とて海にぞ 知雅者の只一人故郷とて出  
 一武家の家のおひとは云々がう痛はしうをしありさま  
 かり家出ゆく外程二日ほど海ににじりしん家より  
 明智日向守若と揃へ往來乃旅人を改まは翼うてい  
 通りかゝく守渡の番兵を人と智めて何困よりいづくへ  
 通る者ちりや審ふやよよとららくふ罵つたりを人  
 甚ど恐まうりありさまそ私に紀州熊野浦の若をい  
 ぬ母ともよやく世に去る渡世のいとも心よ何せに

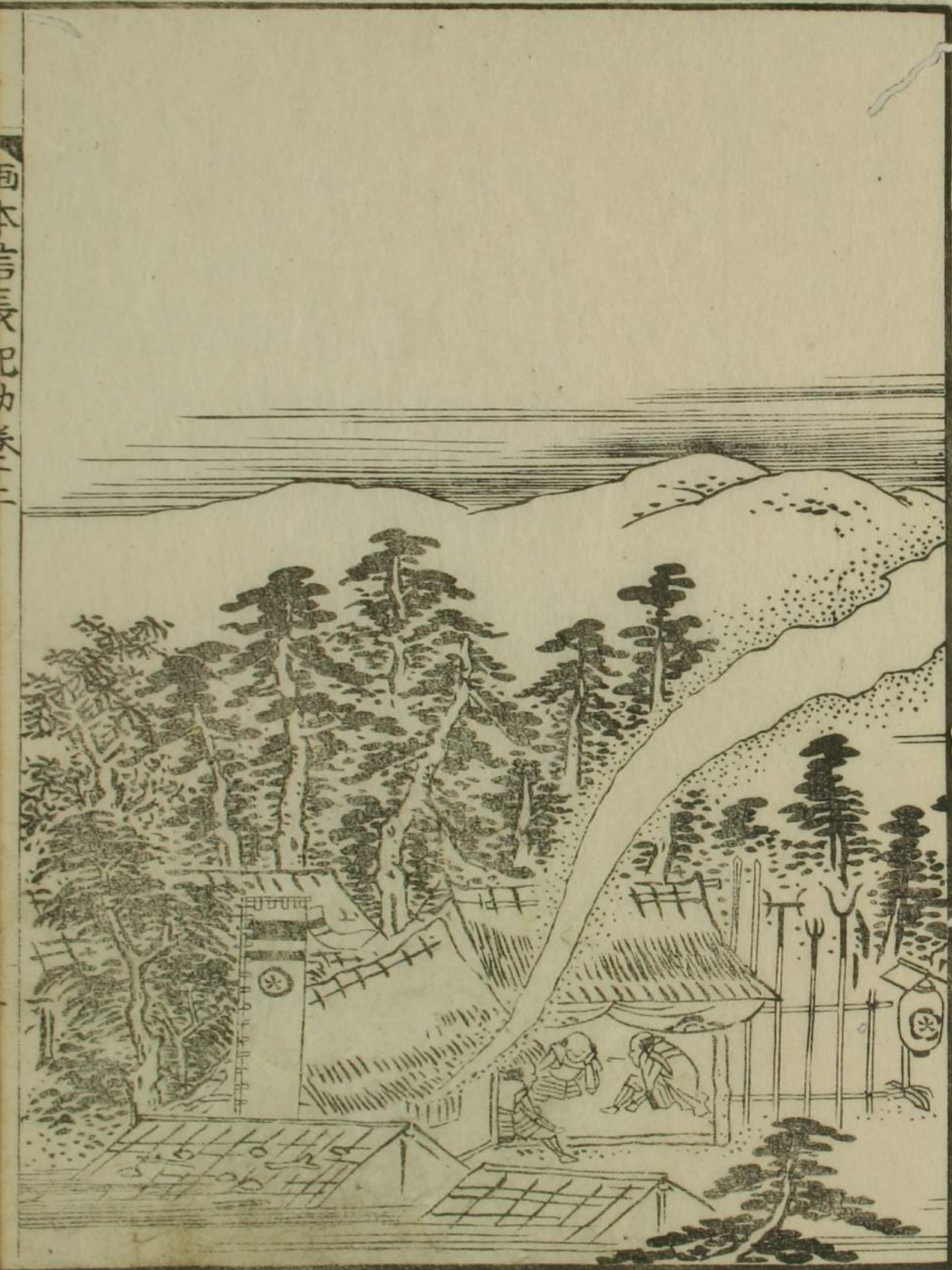


ききこえんと  
鈴本老人  
摘み取り

日本作長言

吉郷さまよりいひかては先より先生一飯一宿のめづりごとくけ  
父母の善提を吊ひかてくぬくの靈場を呪れまゝの  
それのみ今天王寺と拜せまゝんとけ石坂通のゆくと去地  
不案内の者よいらり天王寺への石坂通と河敷へ移るべ  
あな雑うらむしととととととととととととととととととととと  
しき男一人あり義者より老人がまゝい初つさふ心と  
付しが進み出く詰めつらひ已父母と失ひ呪れよ出たりこ  
や父の武家より百姓よりなり親宗伯の親は宗よりわらひや  
と同一老人若て親の中く刀をと帯しなる者よいらりん  
又百姓にてもこれわらくく録よりなる熊野の浦な塩さき  
夜ふまどい父の小舟の櫓楫えまわりなりなる漁火乃

細き釣竿を執りなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり  
るる浪向うきまけかゆきなる海人の子よていとわら番  
兵交て大まきに怒りあつき已の膽をき小妻よりな由附天  
下乃武の信長との河段なりて所をうま欺きて大坂通  
らんともりの紀州雜賀の者なりんし汝が親つさ眼のこ  
どと獵師などの牌よりいひ石山城中へ事ありてあひの  
使やお遠くはし渠引とらう懐中と改めよし殿後下知ぬ  
雜率ともむらくととととととととととととととととととととと  
付する袋の中な南無不可思議光如来乃九字名号と母  
のみ一通ととととととととととととととととととととととと  
味せよと引わらさるる筆を巻くは短刀と強し且つり録



良僧  
孝子と  
般ふ



此若論者其眾人之と於て難段日向守先秀へかくと弘よ  
 先秀即其人と白砂より引出し懐中せし女と披き刀を  
 又七年以着石山新城乃後絶て善信なき証きとありく  
 と書志しけし人今年来るや十日歳家にありて彼  
 杉原んすの口惜とく自殺生害より及んと以成すまの  
 送命と犯し石山城中へき以者えらりれ戦場よゆつと  
 らさ生死の隙をも泅流下されけしと書年り 鈴木孫市  
 及へと宛名せり先秀刃をく大に感し備へ城中乃勇士  
 鈴木孫市が二子老人とふ者ありて款なぐりも初き若の  
 多くの園と城へてとるぐと軍陣又絶て又と生死と修  
 せんとは健げちるるすい助けて城中へ送り度若るも

とも合戦の夢い款方の親族捕得し味方謀斗乃一ツ  
 るれは能勞りて陣中よとら入るしと下知しる小難乗  
 等かこまり老人を引て一室の中よ困窮益々疾まじく  
 番人と附獄屋と抄返しきつりさまなり老人の先期を  
 極めけしを殺さるも戦場よて討死するも又是るの  
 みるく先憎く命と命しるる人て在るるべいふる  
 りて又よ再會せんもとるる心を決め自若と  
 て怨りく色もなうりたるの孫市が二子えちりたりと陣中  
 殊と称懐せり其後三交する以營中もいつそと静  
 疾ゆりの鐘鼓の音耳とつぬき老人の交又履し中  
 以城方幼も人乃りもあひぢる居るおるをき

鈴木孫市傳

灯乃蔭又人あり誰りうらんともほしんんれが牙の長六尺  
 有余の大法師墨乃夜の神々里つけ睡るくくげた  
 るが番兵の番狐大よあ申と夢人が番に来ふ多くの番  
 人眠るるよはあし祿もけ法師と替る者うく只目み  
 見人ざら体のだしけ僧夢人又伺いし汝石山乃城中に到  
 笑又對面はしてんともぞ我只今你と替して修の修へ  
 いくふやくと中夜をふ夢人の只夢の心地して其いひ  
 い知し祿も先と礼と修の美僧大慈悲と密して陣中  
 を遣はしめ修ふるるに死を以て恩と報いし人彼法師  
 諾て夢人を肩よりけ彼番兵の番狐又ゆるくとを  
 通きとも一人も見替る者うく安くと營外又立出るるき

垣と飛をのびくこび城く石山にして証のし何とま天  
 物の不おもやと恐しりり一不のかり

豊人有奇怪而到石山事

攝州東成郡石山本紀奇の蓮如上人乃草創してまより  
 後禮如上人相續て化蓋し修の朝附夕附の勅修急せ  
 修ふるるく門系の美妙系信しはしも清淨の道場なり  
 し又去る元龜のたじゆより法款信長とより又兵馬と勅し  
 宗門を破却せんといはれ是より門と諸國の門後集りて大門  
 及びはまりく又矢倉とつけ固る堀と控同と穿ら隙と  
 深くし飛るるといしころ人昼夜合戦の修人のともく  
 讀經の夢の鯨波と度し諸修女老の種の御着の攻敵の音



老人  
石山乃  
城中文  
跡



画本信長記 卷十二

又化し當附信長本國に返へ帰るといふも附城と稱へ軍  
兵數多勢居る石山の城中も又又安き心なく組多く  
乃番兵守衛非常といはしめ同者と紀州行時と健治の  
なうりたり耐え奉事のしし後又當の城とお家の古被  
の毒湯中の番兵多耳と聳くといや敵方の曲者城中又  
悲ひ入らるるなりと我一又堂の後へ走り来て見らるる程は  
年の以十三に歳の兵少年夜更りの番人又見知らるる  
是源乃同善室中より番兵彼少年とありまてや中  
汝を若より紀州難関の住人鈴木孫市友の子といふと  
飯令孫市友の子よもせよといふ人様乃沖息男といふ  
是かく用心きびしき城中へ悲ひ入らるるを懐しとれとて

徐小田方乃同若くは又城内又返心乃若ありていそ  
又汝と引へりや明白にやさは命を助けくぞ若くは  
かひ偽りなば上人の沖若く引物活如來の引守とて極  
樂往生させてんといふと勢ひ込で素よりたり彼少年は  
とまらびとてうらうらきなく汝等が疑ひ懼り又安へいとも  
我若ては城中へ悲ひ入る見えし我父の當城の勇將鈴木  
孫市郎門若より名乗り對面せんとていふ如住右の国所  
まで小田乃大お明智日向守ら番兵又見知らるる捕ま  
りてあつらうが不思議や今宵一人乃大法師我と寄り  
おの藤地多峰とていふ城に風乃てくまのく當城中  
け不我と捨置忽ちと偽の飛い見失ひぬ先必天物魔邪



九く字じ名な号ごう乃の  
 奇き瑞ずい



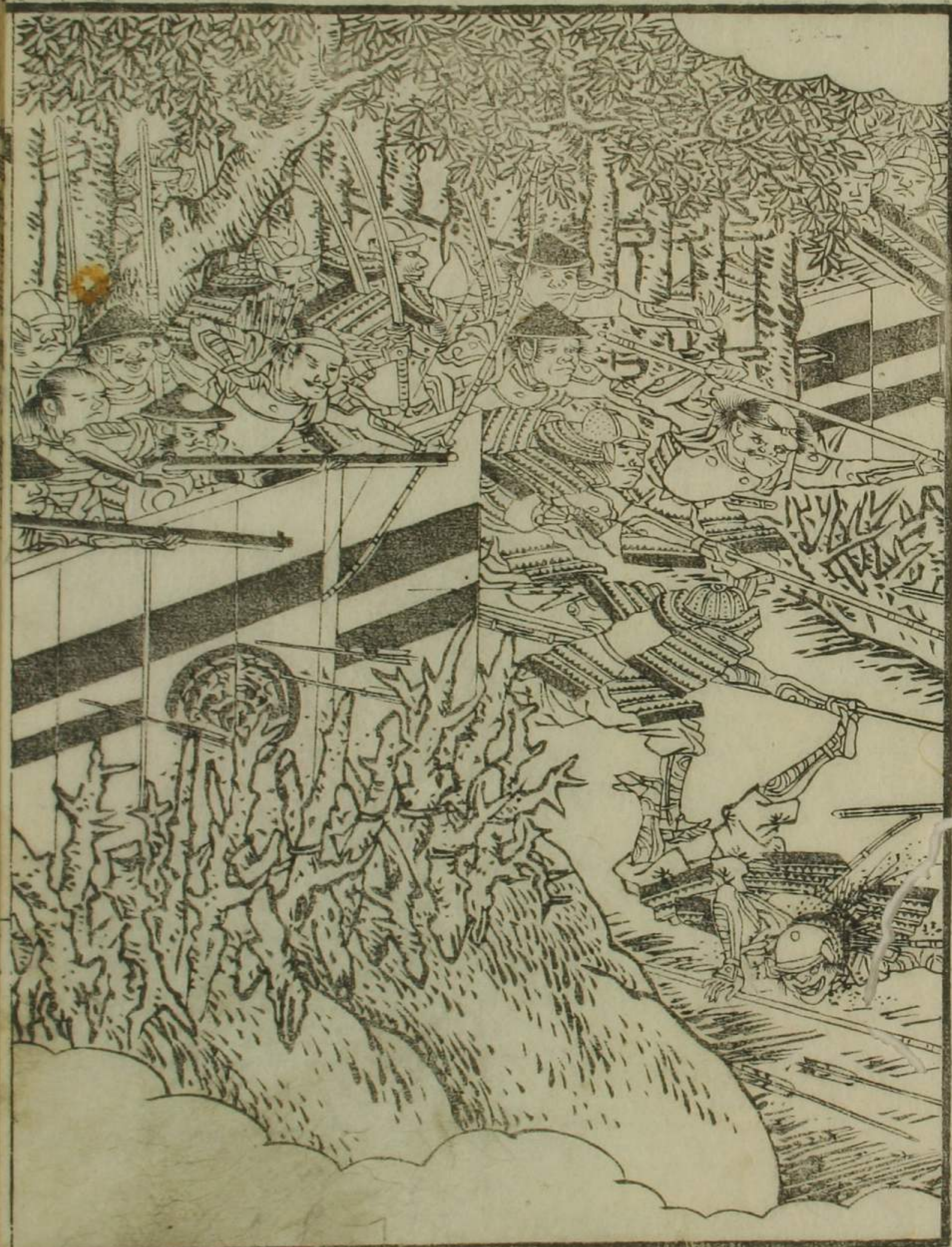
の我上人は荷擔して危難と敷い又と對面せしめんとの斗  
 ひるるべし論の委實孫市反へけ旨と達し子よそいそ人  
 事ししと市路りるべし其余に中事者以てはつたと極側  
 どのくと座し恐ろ換りるるたり番兵多相談して先け  
 旨孫市反へ中入其こと乃知又降へてしとて去るく乃中  
 通しこれに教又任じむる馬林と梁々入夜乃鶴何と子  
 と心いざうんそ人一人城中に立とてはしし強勇の珍  
 本孫市よりはまのき来くこれに八歳とて別とされども  
 見まがふるくも何れぬ我子のそ人後々とてり移るる  
 傍近くまよりて休いふりてけ壁城へおひ入りや始終  
 乃りりと物語とてはゆり小豊人つりり孫市へ西を見

叔父とてはしまはるやと大地と踊りとめぐと歎きさるがやと  
 面ととげはしりども洋又演活」叔も不思議のつりのい母乃  
 去状と元祖と人自筆孫市流し」九字名号古郷と知その  
 耐より肌又付てゆい」と明智が陣石乃摘りぬり悉く棄い  
 去し」又今朝我傍又彼名号安全と押らせ終し且又  
 ぬの消息纏刀一腰もよけ石にこれりいともく父が石  
 又置し」る孫市子細とてまろ眉と志らめは石天物候怪  
 乃石お又相似りり汝初雅々れども孫市が子とて天  
 物又はうまは流狸又魅せりて石を忘却せる柔妙  
 とい人れれし」うは父ととり小孫城乃懐おひもよりり  
 又く本國へ帰りぬ又はへく考と費とてしをるや去去

よと安へたるふ者人の只涙よりとく人の云ふもなり  
 う心と露の短刀引ぬき自害せんとは「つるを番兵多祥  
 考てを」といふは是の孝人の孝心とこそなり「まうく  
 如来の通力方便とこそありてこそく山人の答と教え  
 すりなぐへし稱名所よりい永く忠義と盡さるこそ  
 滋又報恩附徳なり」といふとまじく透し空々たるなり  
 けりよと人の御安よ達し孫市父子よく御花へ系らる  
 事又能て侍安らるべき子細ありとの御候なりけり  
 と人又御酒「御下知又何んぞ」と豊人を誘ひて廣書院  
 へ出たりたり

九字名号奇瑞之事

廣書院の上壇中英は門を亂如と人御父子橋とのうけ  
 御し孫人の老は軍師於本重幸右は家光下回於屋  
 其外近習外候乃侍席と心して連り御せり於本孫市の老人  
 を使の御着たるふ平伏以御よと人侍出さるゝ紀州雜賀郡  
 二孫一孫より一子老人幸若と侍て安よ来りけり孫勝の  
 ちやに及びはえまはれた用山聖人御真筆の名号を持し  
 御拜もまうづやとありふ孫市謹でうけ孫り膝あて  
 推げせられと人恭くと壇の登よりけらせらる御真筆お遠  
 ぼしとるまは孫名に孫人の一御乃西く瑞表仰向し是口  
 曰る念佛しとるのみ難き御法なりと人両眼を御涙と  
 涙人孫の末世の今よ及べとも佛の御まひ空しくは高祖



聖人しんじんも西ざい去しよは悔くわいくせ給たまつた智ち恵ゑの光くわう明めいを教しよらう愛あい  
 又また現げん猶なほとほしきんそや今いま豊とよ人ひとが欲ほつの擣うとのがままうりしも  
 天てん狗く妖やう怪かいのあふあははうう比ひのにじじけけららくくもも用よう山さん聖せい人じんももうう  
 姿すがたと現げんくく板いたひ物もの給たまへへ其その徳とくととままききのの御ご名な号ごうの  
 下した泥どろのまくく付つくくふふくく廣ひろ大おほ邊へんのの佛ぶつ力りきと感かんととじじと  
 指さして教しよへ給たまへへ孫そん市し父ふ子しののままもも又またううけけ産うむむじじと下  
 の人ひとく奇き矣い乃のああいいととははししくく終しゆ不ふ思し儀ぎをを豊とよるるとと佛ぶつ欲ほつ  
 乞こびび宗しゆん門もん永えいくく常じやうんんのの何なにのの疑ぎひひああままききととくく陸りく虫ちゆうのの活かつとと  
 りりのの踊おどりりとと門もんくく歎なげひひくくるる是こゝよりより門もんくくとと人ひと老らう人じんへへ去さるると下  
 へ給たまへへ忠ちゆう心しん門もん下かのの到たう又また加かへ給たまへへ孫そん市し父ふ子しがが歎なげひひ給たまへへ  
 又また物ものははししききんんがが信しん長ちやう一いつくく比ひ達たつ威いををううるるんん天てん下かとと佛ぶつのの擣うひひ

又またししもも忽たち朝あさ霧きりののどどくく小こ田でん乃の覇は業ぎやう影えい滅めつ一いつ如ごとくく一いつくく南なん  
 紀き又また流りゆう落らくしし給たまへへととととししもも嵐あらし乃の浮う雲うんとと拂はらふふととくく數すう百ひやく多たの  
 今いま又またももりり西さい又またもも東とうにに聖せい孫そんのの衆しゆ人じんははししくく河か宗しゆん門もん孫そん繫けいへへ  
 ささうう給たまへへ佛ぶつ智ちよりよりままぎぎらら世よのの例れいらら瓜う仰おほへへくくままららんん  
 一いつけけ折せつ節せつもも小こ田でん勢せいのの隊たいおおもも川かわ分ぶん口のの城じやうとと壁かきめめららるる平へい在ざい監かん物ぶつ  
 安あん反はん平へい在ざい湯たう門もん垣げん若じやく乃の至しおお沼しよ井い内ない同どう綱きやう七しち又また三さん三さん湯たう赤せき人じん  
 牒だつ一いつ合がせせ其その勢せい三さん又また百ひやく人じん恥ちをを陸りくをを下した知ちとと情じやう人じんをを取とりりてて  
 捕とらへへるる本ほん津しんのの砦とりでへへ推おしししてて換か炮ぱうをを飛とびびしし火ひ矢やとと射やりりけけ二に三さん三さん  
 又また表ひらりりるる本ほん津しんのの砦とりで又また勢せいををううるる大おほおおりり下した向むかへへ進しん陣じんをを又また百  
 余あま人ひとのの士し卒そつ又また令しやうしし若じやく後ご乃の指さ口くちとと固かくく壁かきめめららるる火ひ矢やとと飛とびびしし又またと  
 詮せん度どとと戦せんふふりりされればばもも勢せいををううるる大おほ勢せいををれれがが討うちちとと射やりりとと射やりりとと



西本傳長言



小林園苑  
小田乃  
我ひと  
技く

西本傳長言



ちもせに死人をのりえを真を踏蹴喚き叫んで責詰  
 たりけり今いけ逃らる人難くそ刀又さつけりやと母く石山又吹え  
 けは後本重率下知して曰く本津の若味方第一の要  
 害に款又た多く討つ西國の通洛一隊又絶軍也 鈴本孫市  
 志摩与に即の兩人二万余人の還率と率い小田の殘兵  
 等追らして捨り鈴本志摩速に命と令し二万余人の  
 軍兵を率し城戸を開き砂煙りと挙げ本津の若と後造  
 せんと飛びてく又馳りたり

鈴本豊人初陣の名事

去りて小本津の若味方は下向が進出ひがけるき大軍又責  
 たり命うぎり又防ぎ戦へどもあまの多勢入替く攻る程

又力勞とく人よりくるるに石山よりの援兵鈴本孫市  
 志摩与に即二万余人推来るといひつれたりあまのたぬる  
 端沼理の兩人一万余の兵とちら援兵に向ふ陣を張む  
 手も安夏の二ねりおりの兵を下知し城を責るゆいよく急ん  
 石山乃援兵鈴本志摩の兩たぬるしとためらふけしきとなく  
 同端沼理が陣中へ一文字又討てりや喚き叫んで戦ふ程に小田  
 方乃軍兵い今朝よりの戦ひ勞きてや新の援兵よりけ崩  
 され陣脚亂れ既又級形と成りしつる安又筒舟帆葉が新系  
 乃侍又小林園苑定系といふ者あり元い世武士の魁首あり  
 力飽ましく強く乃長六尺有余をまき眼丸く強壯を  
 生い出さるる悪鬼羅刹のてくして思ひてとく人者はし者



圖本行長言初卷二

五

又山神と家と反し人と害し財宝瓜掠め暴悪を及ぶの事せ者  
 たりしと乳世の耐るれ其強勢勇猛なる瓜祿漢し其  
 兵順まよ拓る是教度の軍場よる名を反しいよく母の  
 勇よ誇り人と種にれと矢い傍若無人の曲者るれを符  
 母の家臣いよ及り地門他家の者まよも増まぬ若し母  
 たりけ日小林園苑主人順まの使者として使者の若明智  
 日向守り許り其母の事よけ瓜瓜つりくるが石山の援兵  
 勢ひ強く派神同様の両勢実まよも負まよも立て刃人々を例の  
 驕慢心大ま小後しかの石山勢何程のりやんや一突よはき  
 崩し勢ひよ係じて若とよ羨慕し己一人の功よ備へんと  
 直しころも勢三十余人を左右よ従へ此よ是迄の強かざら  
 たり大長刀を車輪よとせし勝まよも石山勢の撰とま  
 と啼と喚いと近入と刃人しが馬武者歩率のきりひるも  
 と幸切落しに方八方雷光のどく弛巡りて獲まよもはし  
 勇に石山勢園苑一人を斬まよも是教亂して近付得ん志摩  
 よに即け取勢と刃人まよも大ま小怒りもりしき教のりまよも  
 いで突とらて刃人反しとと槍所槍門て互向り園苑何を教  
 を撰り之波瀾のどく獲刀を振て一付一束秘術と画し獲人  
 たりよに即いらいりりり物に槍先園苑透し用て袂裂り  
 碎けよと獲る瓜よに即其長刀よ奪んとせしが系換し  
 て扉風を倒れとく馬より下へぞんと落り園苑地より  
 かへしと物んとく瓜獲刀り下へ志摩手が良多る六十余

たり大長刀を車輪よとせし勝まよも石山勢の撰とま  
 と啼と喚いと近入と刃人しが馬武者歩率のきりひるも  
 と幸切落しに方八方雷光のどく弛巡りて獲まよもはし  
 勇に石山勢園苑一人を斬まよも是教亂して近付得ん志摩  
 よに即け取勢と刃人まよも大ま小怒りもりしき教のりまよも  
 いで突とらて刃人反しとと槍所槍門て互向り園苑何を教  
 を撰り之波瀾のどく獲刀を振て一付一束秘術と画し獲人  
 たりよに即いらいりりり物に槍先園苑透し用て袂裂り  
 碎けよと獲る瓜よに即其長刀よ奪んとせしが系換し  
 て扉風を倒れとく馬より下へぞんと落り園苑地より  
 かへしと物んとく瓜獲刀り下へ志摩手が良多る六十余



日本書紀卷之三

人一日は延隔きびしく防ぎ我ひをと懸ふく退きける石山  
 方乃大お勇武のきこえるき志摩とに即りかくのりてく  
 かりたるは後兵多るうひ思は右往花往又丸と走る小松  
 園花勝よりあり石山乃弱兵一人も走るゆらうれと大者よ  
 呼り大まういよぬく荒まらるいもとほしかりたるけり換之  
 け附鈴木孫市の小るき丘よ馬を立味方と下知してあ  
 ころが小田乃熱勢勇気とほし石山方級軍よ及んとは是  
 令く小松一人よ延りやまうう者れが誰よもあはけ者  
 を討とらよと志き門く下知とほしつ道と互に即と入討  
 ぶうりし大別乃志きもの我討とらんうら者うくあぐと  
 切らるゝとまかり附よ鈴木が軍隊の中より脱い華の具

又黄金作りのおちかと帯連勢毛あつ馬よ跨り走るう小  
 名のりたるの紀修園難加乃後人鈴木孫市即良園が二  
 鈴木を人少年十に敵軍のうかたじゆ之年若れども大  
 別の若るうぞ首をてる名に婦人孫人とちか接をばり討て  
 うまば小松園花よき小笑ひ押のまどれたの小松おむい  
 不足之とや中へ逃よとまひ捨く孫市が本陣めがけ延り  
 を小松と侮りて見覚とまうせ終るると稲妻のどく切て  
 うまば園花大の眼とらつ門と見開き笑月と顔も笑しき  
 小児めお慈悲の心とて命斗と助け入るは飛で火に入  
 盡虫け世のいとまをせんといいろ門と長刀打ちり只一羅  
 と討たり小松よ遠くを人か小孫花後花右と奪也





討て出と追まらんとく下向少進自ら三百余人の遣兵と  
 ありて人城戸を用ひて切て出れば鈴本孫市志摩より即  
 二子余人周を廻り權合せしむ我より小終又小田方敷  
 又崩とぞれ我きたると逃ゆと追詰く討て首二百  
 余級け附日西山又没し殊交雲深く敷ひ多り星の光  
 見えんぞれ我いし是と方りと逃る敵を追どてあて其  
 疾の本津の砦又宿陣せり

繪本拾遺信長記初篇卷之十二終



